

『人形劇 寿歌』は1979年の衝撃を 思い出させてくれるかもしれない

名古屋在住の北村想が1979年に発表した『寿歌』は、その後の現代演劇に多大な影響を与えた名作。この『寿歌』が初めて人形劇になります。そこで、あつぷ号外として同作を大特集。『人形劇 寿歌』取材していくと、アノ初演の衝撃に迫る予感が……!!

1979年12月、北村想率いるT・P・O師★団が大首根の鈴蘭南座で異例の公演を行いました。題名は『寿歌』。登場人物はゲサク、キョウコ、ヤスオの3人。初演ではキャストの異なる春・夏・秋・冬の4組が、それぞれ個性豊かな『寿歌』を繰り広げました。観客は実験的かつ賑やかな趣向を喜ぶ一方、作・演出の北村が拓いた全く新しい劇世界に衝撃を受けます。

時は核戦争後の近未来。関西とおぼしき荒野で芸人の男女と謎多き青年が出会い、しばし旅を共にして、別れる——。舞台と客席を反対にした演出も功を奏し、ゲサクとキョウコが去っていく終幕には涙する人が後を絶ちませんでした。T・P・O師★団らしい軽やかな笑いに満ちているが、同時に深い哀しみに包まれ、それでいて一筋の光を感じさせる三人芝居。この『寿歌』が演劇的原体験になった若者は大勢います。愛知人形劇センターにもかつての演劇キッズがおり、人形劇化につながりました。

演出を務めるのは、『犀』の世界初人形劇化でも手腕を發揮した二ノキノコスター(オレンヂスタ)。また、作者の北村が声の出演という形で初めてゲサクを演じます。これはもはや事件! 稽古で二ノキノコスターの方向性を理解してきた北村は、彼女の作品解釈に太鼓判を押しています。他にも声では、北村の信頼あつい荘加真美(劇団ジャブジャブサーキット)、当センターオリジナル作品でも活躍著しい山内庸平が出演。また人形操演はPuppet Theaterゆめみトランクの桑原博之とゆみだてさとこ、身体表現にも長けたラストラダカンパニーのLONTOとChangの4人。そして画家・イラストレーターのヨコヤマ茂未が人形美術に初挑戦します。『寿歌』の初演は4組の競演だったことから、いろいろな見え方が可能でした。『人形劇 寿歌』もまた(人形)の特性から無限の可能性が広がっているはず。初演を知る人は懐かしい記憶を思い出すかもしれませんが、初めて体験する人は未知の衝撃を期待してください。

人形美術のヨコヤマ茂未によるイメージビジュアル



人形操演の稽古風景



人形製作の様子



声の録音風景



ストーリー

核戦争の終わったある関西の地方都市。人影もまるでなくなった荒野を行く旅芸人のゲサクとキョウコ。そこにいきなり現れる不思議な芸を持ったヤスオ。ゲサクとキョウコのあてのない旅路にヤスオが加わり、家財道具をリヤカーに積んで三人は荒野を進む。目指すはどこか……。



Profile
北村 想

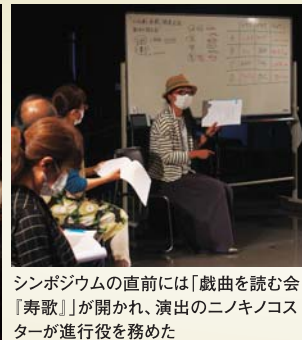
1952年7月5日生まれ。劇作家・エッセイスト。故郷ナシ。(滋賀県立石山高等学校卒業)。1979年の『寿歌』を含む書籍『不・思・議・想・時・記』を、名古屋の(株)プレイガイドジャーナルから半自費出版で刊行。1984年『十一人の少年』で第28回岸田國士戯曲賞受賞。1990年『雪をわたって…第二稿・月の明るさ』で第24回伊國屋演劇賞個人賞を受賞。2014年『グッドバイ』で第17回鶴屋南北戯曲賞受賞。2013年演劇論書『恋愛敵演劇論』(松本工房)刊行。24歳から鬱病を発症、未だ月一回診療中。頸椎疾患によるベインで週一回神経ブロック注射。趣味は囲碁(関西棋院アマ初段)。ときどき並行宇宙を往来スル。愛唱歌『北風』(小坂一也)。



Report 重要人物たちが『寿歌』を振り返るシンポジウムも開催されました!



シンポジウムの様子 中央にあるのは初演でも使用された旅一座のリヤカー



シンポジウムの直前には「戯曲を読む会『寿歌』」が開かれ、演出の二ノキノコスターが進行役を務めた



コピーでは貴重な初演のチラシなど資料を展示

10月には関連事業としてシンポジウムを開催。作者の北村想はもちろん、名古屋プレイガイドジャーナル時代からの仲間である編集者・小堀純、北村に関する書籍も出版している演劇評論家・安住恭子、続編『寿歌Ⅳ』のリーディング公演でゲサクを務めた作家・桂九雀、『人形劇 寿歌』企画者の一人である音響家・ノノヤママナコが登場しました。

北村は執筆の経緯として、健康状態が悪く滋賀の実家で寝たり起きたりしながら書いたこと、手が止まると辞書を開いて目に入った言葉で書き進めたこと、印刷用ボールペン原紙に直接書いたことなど語り、観客は奇跡のようなエピソードの数々に驚きました。

小堀はそんな伝説を身近で見てきた人物。刷りたての台本の匂いから当時の女優陣が

急成長していた劇団状況まで、昨日のこのように聞かせてくれました。そして北村がもたらした「運命の50万円」によって『寿歌』収録の書籍が出版できた話、初めての東京・大阪公演をプロデュースした話には泣き笑い!? 苦労話の中にも若さの勢いを感じました。

新聞記者だった安住は80年の名古屋凱旋公演で初体験。それまで観てきたリアリズムとは全く異なる劇に圧倒されたと言います。逆に(?)九雀は加藤健一事務所の公演で観てワケがわからず、でも心には残ったという事実を告白。ノノヤマは高校生の時に初演を観て泣いてしまい、82年に演劇業界入り。長い時を経て『人形劇 寿歌』実現につながったことを感慨深げに話しました。

愛知人形劇センターPresents 『人形劇 寿歌』

脚本・監修:北村想
演出:二ノキノコスター(オレンヂスタ)
人形美術:ヨコヤマ茂未
声の出演:北村想、荘加真美、山内庸平
人形操演:桑原博之、ゆみだてさとこ、LONTO、Chang

11月30日(水) 19:00、12月1日(木) 14:00/19:00、
12月2日(金) 19:00、12月3日(土) 13:00/18:00、
12月4日(日) 15:00

※12/2(金)、12/3(土) 18:00の回はアフタートークあり。

詳細は『人形劇 寿歌』公式サイトを検索。
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
前売3,500円 当日4,000円
※センター会員3,100円(事前申込に限る)